

群馬詩人クラブ 会報 No. 296

編集／群馬詩人クラブ幹事会
代表／磯貝優子
発行／群馬詩人クラブ事務局
〒370-3504
北群馬郡榛東村広馬場1067-2
現代詩資料館「榛名まほろば」内
印刷 三協印刷
振替番号 00160-4-708314 中澤睦士

主な記事

- 詩誌は、いま-⑦ 詩誌『燦』の現在
志村喜代子…… 2
- 愛敬浩一著『詩のふちで』を読んで
田口三船…… 3
- 高崎現代詩の会 朗読会報告
清水由実…… 3
- 詩集評 …… 4
関根由美子『水の記憶』 井上英明
樋口武二『呼ぶひと、手をふるひと』
金井裕美子
- 大塚史朗『桜など』 齊藤守弘
- 新入会員あいさつ …… 6
小嶋明子／寺内 拓
- インフォメーション …… 7
- 年刊詩集原稿募集 …… 8
- 受贈詩誌御礼／編集後記 …… 8

群馬詩人クラブへの期待

梁瀬和男

群馬詩人クラブの発足は昭和三十二（一九五七）年五月であったので、やがて六十年の伝統を形成する事になる。その期間に、現代詩の様相は時代の文化情勢と共に多彩を極め、群馬の詩活動も詩誌・詩集のさかんな刊行に見られるように、活発化した。いま、個人的に発足時から現在までをふり返ると、様々な業績が回顧されるが、ここでは二、三の期待を述べることにする。

私が日常感じているのは、六十年の間に多くの先達の詩人や、同時代を過した詩友が、すぐれた作品を残して旅立った事である。しかし、私達は現在、それらの人達の作品に親しみ、その遺産の価値に眼を向けているのだら

うか。また正当な評価と遺産の継承に、詩人クラブとして取り組んでいるだろうか。おそらく、詩人クラブの会員には、それぞれ敬愛する先達の詩人や、詩活動を共にした同志が存在することであろう。私は、そのような回顧や追慕をクラブの場で組織的に発表すべきだ、と思う。それは会報を利用したり、研究会という形で実現できると思う。

次に感じているのは、総会の折に、県外の詩人による講演会を行っていることである。私はその講演会を県内の詩人が行うべきだと思っている。県内には、すぐれた論客や研究者が少なくないし、それによってクラブの活動の分野が拡大すると思う。私が幹事を

していた時代には、「物故詩人の業績」や「個人の詩的主張」、「同人誌の活動」などについて講演会を年に二回開催していた。そしてその講演会では、質問をかねた討論も行われ、それが会員間の親交を深める結果にもなった。最後に会報についてであるが、私は会員の自由な詩に関する意見を聞きたいと思う。しかし、限られた紙面だから規定を設けるとか公平な人選のルールを決めるなどして、常時詩の課題を語りあうようにしたい。それらによって会報は充実した内容になるのではないだろうか。また詩の課題の発掘にもなる。

※

現在、会報は、二九五号を数える。この号に達するまで、会報は歴代の編集者と幹事の努力によって発行されて来た。私は創刊号から保存しているが、時に古い号を読むとき、この会報に、群馬詩人クラブの歴史を感じ、多くの編集者の個性を思い出す。また二九五号に添付された名簿を見ると、新しく加入された方が多いのに気づく。それと同時に名簿から氏名の消えた人々を思い浮かべる。すでに他界した人の業績、新しい会員の創造。群馬は「詩の国」と喧伝されているが、群馬詩人クラブは「詩の国」に恥じない道を進んでいる。ますますの進展を期待している。

詩誌は、いま⑦

詩誌『燎』の現在

志村喜代子

三年目の「燎」。なんとという好機に詩誌紹介せよとのありがたさ。(現在)と題したからには少々の弁護を交えながら振り返る、その要請が進行形であることを意味する。郷愁に似た感慨、いやいや緊張感こそ実感である。

二〇一四年二月二十八日創刊。誌名は「燎原」の燎、激しい勢いで野原を焼く意。その烈しさは、防ぎ止めようがない状態で、燎原の火の如しとは、まさにわれらが志なのだ。あとがきで、編集の神保武子は、「詩を書くことは自分に対して真摯に向き合うことでもあります。目を逸らしたいこと、逃げ出したことがあっても、まずは正面から向き合っていて、せめて真実を明らかにする勇氣はいつも持っていたい。」と記している。自分という他者、他者であり得る自分という者の謎に挑み深める同志六名による発足であった。

上林忠夫 佐藤恵子 志村喜代子

神保武子 武井幸子 原田鰐(表紙も担当)

表紙の美しい裸婦に感激しながらの合評会。全員打ち揃い、高崎市内のレストランで追熱した。

六月刊行となる第二号は、須田和子さんが

加わり七名に。季刊四号の発行を果たし、意気も新たな五号で執筆した斉藤みね子さんは、惜しくも体の不調で本号のみの参加となった。二年目の節となる八号では、磯貝優子さん、小嶋明子さんが同時に加わり九名になり、最新九号(三月刊)には寺内拓さんが参加。総勢十名で三年目に突入、会員の定着を切に念じ充実した歩みを進めたい。

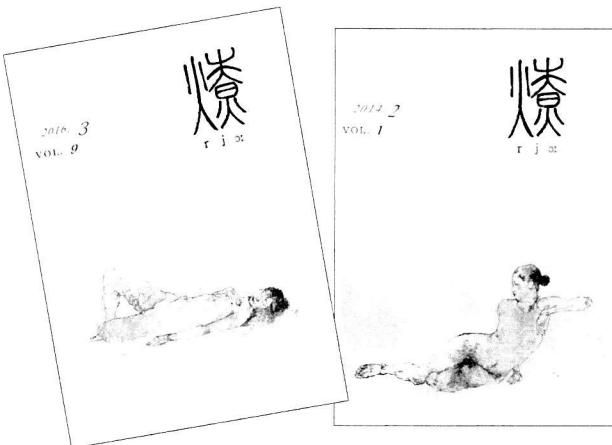
充実と言って、ふと口ごもる。どうするところが充実と言えるのか。惰性の落とし穴をもっとも恐れる。ところがその穴こそつねに、陥しこむ構えであんぐりと口をあけているのだ。すべて自己意識に委ねられているのだが。

若手の俳人が、こんなことを書いていた。「季語の持つ世界を更新するような作品を書く」「それはすなわち、日本語の可能性に挑むということである」。詩はどうだろう、季語どころか一切の制約はない。季語への挑戦に驚意したのは、歴史と伝統に磨きぬかれた語の宝庫、その魅惑、それゆえの新鮮さ、包含力に巻きとられ、盲目的に従属していたにすぎない。言葉の土壌に激震が走ったのはいうまでもないのである。

手垢に等しい感性の鈍磨に、くすみにくすんだ言葉に依拠せざるを得ない日常生活ではあるが、その生活あつての生きものであれば、堂々謳歌して迎え討てばよいのである。討つて立つ自己が言葉だ。自己に沈潜するほかな

い。日本語の可能性とは。八代集に及ぶ古典文学に根差すほかないのではないか。ほかにどこにも逃げられない気がする。日本語の原点にもどってみよう、真摯に。だからせめて自分を脱皮したい。呻吟しひそやかに脱皮してやまない『燎』でありたい。

- ・創刊(二〇一四年二月二十八日)
- ・季刊(三、六、九、十二月各一日)
- ・合評会(刊行月の最終日曜日)
- ・原稿締切(一、四、七、十月各月末)



愛敬浩一著

『詩のふちで』を読んで

田口三船

この著作は、昨年十一月、愛敬浩一氏が以前に発表した評論・詩集評等をまとめて『詩的現代叢書8』として書肆山住より発行されたものである。全体が四部に分けられ構成されている。

第一部は、一九九八年から長年にわたって【鰐組】に連載された詩を中心として、著名作家の小説をも含む幅広い評論・随想・作品評等三十数篇からなる『詩のふちで（抄出）』を収載し、愛敬氏の文学に対する真摯な姿勢と造詣の深さを感じさせている。

第二部では、第一部以後に書かれ【東国】【鰐組】等に発表したもので、下村康臣・村嶋正浩・相生葉留実・清水博司・布村浩一・中上哲夫・伊藤芳博・田中勲・吉岡良一各氏の詩集について、的を射た鋭くも温みのある論評が展開されている。

第三部では、【上毛国語】【東国】【上州路】等に発表した群馬にゆかりのある詩人松本悦治・富岡啓一・清水房之丞・岡田刀水士・萩原朔太郎のほか高村光太郎をとりあげ、各人の生きた時代を背景にして愛敬氏ならではの詩人論、詩集評が展開されている。特に、天折詩人に光を当てた論説は胸に迫るものがある。第四部では、【詩的現代】に発表した『詩

と歌謡』が収載されている。詩と歌謡については、確かに通底したものを持ちながら、なかなか評論の俎上に載ることの少ない分野であり、愛敬氏の豊かな人間性と幅広い識見を示すものである。なお本論から逸れるが、【現代詩手帖】3月号の池辺晋一郎氏との対談の中で述べられている谷川俊太郎氏の言葉「詩は、どんなにがんばっても意味から逃れられないわけでしょう。音楽のほうがぼくの理想に近いわけですよ。」がふと頭をよぎった。

順序は前後するが、第一部の『詩のふちで』は大分以前に出版を考えていたらしく、既意用意されていた今は亡き小山和郎氏による「跋文」もここに掲載されている。いかにも小山氏らしい着想で、しかも実に当を得た文章なので、その一部を次に紹介してみよう。「改めて彼のフィールドの広さには驚かされた。そのうえ私が未見の人を対象にしている場面もかなり多く、大袈裟に言えば数知らずにも迷い込んだような所もあった。」・「もともと彼の詩に関わる基本は、詩とそうでないもののあわいで、フェアかフェアウルの判別を任された線審に似ているかも知れない」

何とも言い得て妙。詩人としての愛敬氏、評論家としての愛敬氏、その二つの顔が小山氏の眼を通して見事に浮かび上がってくる。ところで、装画の坂上清氏は、私の詩友であり、詩人基芸・文人基芸を通じて閉基の好敵手でもある。末筆ながら愛敬氏並びに坂上氏の益々のご活躍をお祈り申し上げて筆を擱く。

—浅き春に詩を味わう—
朗読会報告

清水由実

例年通り、高崎現代詩の会主催の朗読会が、二月二十八日(日)午後二時より、カフェあすなろで開催されました。

思い返せば、今年で九回目。一回目は、高前パイパスの「ノイエス朝日」で行いました。当時は、会員のみの参加でした。高崎中央公民館の視聴覚室で行った際は、高経大の学生の方々をお招きしたり、会員外の方々も朗読して下さったり、回を重ねる度に参加人数も徐々に増えておりましたが、今回の盛況ぶりは嬉しい限りでした。会員、会員外合わせて二十五名。終了時刻を過ぎても、熱気で溢れていた会場。朗読された詩の余韻が、そこしこに残っているような想いがめぐりました。

大手拓次、長田弘、平林敏彦、秋山清、谷川俊太郎、國峰照子、佐伯圭(自作詩)、真下宏子(自作詩)、そして「スクランブル」掲載の会員の自作詩、自作の短歌三首、田村隆一の連読等、豊富なことばの地図が、耳に脳裏に心に描けたような二時間でありました。何社かの新聞掲載の助けもお借りして、飛び入り参加の方も四名程いらっしゃいました。喜ばしいことです。遠方から足を運んで下さった皆様、感謝の限りです。

来年も、梅の香が舞う二月、より多くの皆様とお会いできることを願うばかりです。

詩集評

決別の儀式

— 関根由美子詩集『水の記憶』 —

井上英明

葬儀の中で僧侶が棺桶に水を振り掛ける、あるいはキリスト教の葬儀においてもそんな場面がある。差して違いはないだろう。魂を聖別しあの世に送るそんな意味だろうか。魂を別してこの世から遠ざける、死者の怨念を振り払う、そんなところか。

関根の「水」は少し違う。水は断ち切るものであると同時につなぐものとして存在させている。「あの人」と「わたし」を隔てる水の流れる橋を架け、さらにもがくのである。橋はこの世とあの世を結ぶものとしてそこに在り、関根はそのほとりに居て、もがいているのかもしれない。

橋の袂で

わたしが わたしを曳き留めている

向う岸から

しらじらしい声で

あのひとが わたしを呼ぶ

『みえない橋』最終連

あのひとの声を「しらじらしい」と表現しなければならぬ切なさ、決別の儀式がそこにあると思うのだ。優しさだけでは詩を書かない関根の姿勢だろうか。

『きざむ』という詩にもそれが言える。大根を相手に「しろい肌を／断ち切ってやる」

や「包丁の切っ先で／組板にあまたの傷をきざみ」は日常の風景であるが、この風景に感情を重ねていく表現方法が面白い。「留守」という詩は、出掛けに玄関の鍵をかけたまま、「忘れて」置いてきてしまったというほほえましい詩だと思っていたが、読み見返して思ったのは、橋を渡る決意としてそこに残したのだと気付いた。

『残り火』においても、「にぎりかえしてくれた手が／残り火のように／帰りの／電車のつり革を揺らしている」と書く。一見、病気の「あの一と」を思いやる抒情詩のように見えるが、揺れるつり革に「あの一と」の消えていこうとする命をみている。視線は客観的で、抒情詩でありながら「あの一と」が登場する詩は冷静なのである。仕掛けを織り込みながらしたたかに作り上げていると感じた。

関根はもう一つの顔を持っている。『月夜野河原』は、万葉集の東歌を引用している。羽化したばかりのトンボがはにかむ少年に見え、少年の歩みによって波立つ水に濡れた少女の関根は、いたずらっぽく小石を拾って少年に仕返しをしようと企む。東歌を下敷きにしながら、自分の世界を作り上げている。この詩も秀作である。また色の表現、「薄鈍色」

や「はな浅葱色」などの使い方も面白い。関根が「あとがき」で、水への思い入れを書いているが、誘ったり拒んだりする水の魔力だろうか。人は土に返るだけではなく水にも返るような気がした。

樋口武二第七詩集

『呼ぶひと、手をふるひと』

「魂乞ひ」のものがたり

金井裕美子

「恋ひ」というのは「魂乞ひ」である。恋人の魂を乞うことだ」と言ったのは折口信夫。これを引いて、国文学者の中西進は著書『ひらがなでよめばわかる日本語のふしぎ』（小学館）の中で、次のように述べている。〈古代では魂は浮遊するものと考えられていました。魂の結合こそが、恋の成就でしたが、それがなかなか実現しないので、古代の「こひ」とはつらいものでした。逢いたくても逢えない切なさ、これが「こひ」だったのです。〉

この詩集全篇の底深くに、静かに流れているのは「こひ」。言葉では言い尽せぬ恋情、古代から変わることはない「魂乞ひ」のものがたりが語られている——と、読んだ。

ものがたりの事柄については、事実であるか、無根の夢であるか、詮索する必要はない。ただ、そこに書かれたことをたどって、溢れる言葉で構築された散文の形に馴染む頃には、樋口詩のものがたりに引き込まれていた。

ここでいうものがたりの「もの」は、「物」。「物が憑く」にも通じる畏怖の対象、あるいは霊、あるいはそのひと。目にも見えなくても確かに存在している、すべてのものの本質といつてもいいかもしれない。そう捉えて読み進めると、呼ぶひと、手をふるひとの気

配が強まり、ついぞ忘れていた傷つきやすい初々しい感情や埋もれていただいたいなものたちが、優しく呼び起こされる心地がした。

つじつまの合わない出来事。やりどころのない願い。押さえきれない思慕の念。心当たりのない裁き。どこか見慣れた景色の中に、懐かしい家や場所がある。探し求めているひとがいる。切なさとかなしさ。遠くはるかな記憶。そして、唐突に水を差し出され、その水を素直に飲む男がいる。しつかり握る手がある。雨のにおい。時間は止まったままだ。錯綜し、出会ってしまった。ただそれだけのこと。――「夢」「幻」と思えば夢となり、幻となり、ここには時間、空間、場合を越えて、互いの魂を乞う男と女がいる。

日常に片足を残したまま、もう片方の足を、暮しに潜む異界に踏み入れたしまった時、人は思いがけない真実を見ってしまうのだ。そのひとをめぐる「魂乞ひ」のものがたりに見え隠れする真実。それはかすかに妖しい芳香を漂わせている。この香りこそが、豊かな語彙と叙情的な表現力に支えられた樋口詩の魅力といえるのではないだろうか。

「I章 日常という序章」が四篇、「II章 狂おしい時間に」が十一篇、「III章 日常から森へ、」が十一篇。全二十七篇。目次も兼ねた各章の小扉には、行仕立てにタイトルが列記されていて、短詩然としている。このような趣向を凝らすあたりにも、樋口さんの個性が現われているように思う。

大塚史朗詩集『桜など』に おける原点の表象への誘い

齊藤守弘

このたび大塚史朗氏の21冊めの詩集『桜など』が刊行された。そのあとがきでは①と②の章は半世紀以上に書いた作品を載せたとして著している。そのうち作品『舟―I II III』や『音の詩』は、氏の原点と思ひ拾い出したといわれる。そこで読者層の一人として、大塚史朗詩の原点の表象の探求への誘いを覚えるのである。

著者大塚氏の原点とは、私は第一詩集『頬かぶり』（一九七六年刊行）をみるとわかる。一九七五年五月／おれたち駒寄農民は／長い間かぶり続けた頬かぶりをとって顔をさらし／言葉をさがし／火をもやす。

このように、詩は胸の火に炙りだされた言葉である。

知られているとおり大塚詩作品には花や草や木などが多く表象されている。『桜など』においても、桜ばかりでなく、あかい花、あざみ、牡丹、のびる、松、振花、栗など、それぞれ凄く静かに現われてある。これらはそれぞれが原点の土の上に立つ表象であり、胸の中の火なのである。

私は大塚詩人こそ抒情の伝統と概念を打ち砕いた反逆青年であったと考える。その自尊心は強く、文学の正道を知り、機能主義の

外来を拒ぎ、その表現体に嘔みつく。

資料として第二詩集『生産』（一九七七年刊）の作品「赤まんま」の初連をみてみる。赤まんまの火の表象である。

くおまえはうたうな／あかまのうたうたうな／とうたったなかのしげはるさんよ／あなたのおうた大好きだったが／今も尊敬しているが／おれはうたう／あかまんまのうたうたう。

おれの胸郭にとつと／侵入してくるのだ、という文字と言葉は何者にも変容を許さず、置換えることができない。言い換えれば、暗示ではなく比喩でもなくそして象徴をしていない赤まんまである。

そうして詩人の抵抗と反逆はどのようであるべきか―抒情詩、象徴詩、プロレタリア詩など素養にたちながらそれらの表現の機能性に嘔みつく―胸に火をともして言葉をさがす―この新しい表象に心を萌やす―これが大塚詩の原点ではなからうか、と、それぞれの問いが胸をよぎり、拡がり、立ち止まりもする。しかしこの上なく充実感に誘われる。その原点の表象の問いの領域があまりにも大きいからである。

別の角度からみると大塚詩風は散文調であるともいえると思う。しかしそれは一人大塚氏の問題ではなく、主、述、目、補などの文法、とりわけ主格の貌の出誦でなければ満たされなくなりつつある読者層の文章文法観のひろがる土壌のテーマと思うものである。

● 新入会員 あいさつ

里程標

小嶋明子

娘たちのベビータンスは、お気に入りのシルルだらけでした。ここはいいと決めると、色別の小引出しも開き戸も、下の色が見えない位、次々とシルルで埋め尽くされて行つたのです。

ふと思うと、自分もこれまでに、通過儀礼のように目印を、あちこちに貼って来たような気がしました。

二十の頃、台風一過の青天に恵まれた山に出かけたことがあります。ところが途中、沢渡りの鎖が切れていたり、岐路で道標の向きが変わっていたり、予定のコースは断念、忘れられない登山となりました。

その後も、岐路に立った時、水が下つてやがては海に行くように、どこかに着くと信じて、迷いを封じてきたのだと思います。尾根に出れば、遠い別されが見えたりして……。これからは、次世代の風が生まれる眼下の里へと下りながら、時と共に過去の印も消えて、生地の自分に戻って行けるのかと思われ

ます。
後れ馳せながらお仲間に加えて戴き、新たな一歩となることを感謝しております。

どうぞよろしく、お力添え下さいませ。

● 不合理な思考

寺内 拓

今度、会に入会致しました。よろしくお願

い致します。私が詩を書き始めたのは学生の時からです。その後、暫らくの間ブラタが

あつて、数年前からまた書き始めました。休んでいる時も頭の隅で詩のようなものが

何かのエビログのように、時々垂れさがつてきて、その度に打ち消していました。そして何故詩に惹かれるのかと思いつつ、

遠ざかることはできなかったのです。

私の詩に対するシチュエーションのひとつに、西脇順三郎のいう、「詩を想像するということとは「不合理な思考」をつくり出すことである。」という言葉です。

さらに、「人の脳髓は合理的な思考からばかり出来ているから不合理な思考をつくり出すことは非常に困難である。」と。

「このためにすぐれた詩は全面的に衰微してしまつた。」とも。
詩をつくるにあたっては、それぞれ種々の考え方があって当然のことです。自分の思いとしては、方向を示す詩、そしてステイトの否定。

それが底辺に流れていて、いま私の詩のモチベーションになっています。

◆二頁の「詩誌は、いま」について

二〇一四年四月より、当会報に掲載されてきた詩誌は次の通りです。

第一回「夜明け」(286号/二〇一四年四月)

第二回「東国」(287号/同年六月)

第三回「裳」(288号/同年九月)

第四回「高崎現代詩の会」(289号/同年十一月)

第五回「けやき」(291号/二〇一五年四月)

第六回「紫翠」(294号/同年十一月)

幹事改選により、編集担当が替わりましたが、この企画は、現在発行されている詩誌の活動を

知る上で必要と捉え、そのまま継続することになり

ました。引き続き取り上げるにあたり、連載名を「詩誌は、いま」と致します。従って、

今号の「療」は、「詩誌は、いま⑦」として掲載しました。(会報担当)

インフォメーション

第30回まほろばポエトリーステージ

近藤洋太・講演会

「宋左近／辻井喬／粟津則雄」

日時 5月7日(土) 午後2時～

場所 現代詩資料館・榛名まほろば

会費 1,500円(1ドリンク付き)

定員 50名

申込 電話・FAX 0279-55-0665

Eメール harunamahoroba@nifty.com

インフォメーション

第15回 あすなろ忌

日時 4月10日(日)

会費 5,000円

(第1部のみ参加は資料代・珈琲代850円)

内容

【第1部】歌・講演・詩朗読

(午後2時～4時30分)

場所 コミュニティカフェあすなろ

・歌とトーク 私の歌と「あすなろ」

天田美佐子(メゾソプラノ)

・講演 「あすなろ」を追いかけて

藤井浩(上毛新聞社論説委員長)

・詩の朗読 志村喜代子、斎藤みね子、

平方雪子、黒川初美、関口将夫

【第2部】懇親会(午後5時～7時)

場所 豊田屋旅館

連絡先 事務局：曾根ヨシ

電話 027-232-6251

第19回 大手拓次をしのぶ会
「薔薇忌」

日時 平成24年4月24日(日)

参加費 500円

一部・墓前祭

大手拓次墓前 13:00～

二部・語る集い

磯部温泉会館にて 13:30～

講演：山口和士さん

(第一回大手拓次賞 佳作受賞者)

三部・茶話会

薔薇のケーキをいただきながら

連絡先 事務局：大手拓次研究会

代表 真下宏子

電話 027-385-5703

高崎現代詩の会

現代詩ゼミのご案内

高崎現代詩の会では、午後2時より総会が開かれ、総会終了後に現代詩ゼミを開催いたします。会員外の方も参加もできます。皆様、どうぞいらしてください。

現代詩ゼミ

日時 4月17日(日)

午後2時40分～4時20分

講師 國峰照子さん

演題 「自作詩を語る」

お問合せ 会長：志村喜代子

電話 027-352-9745

第44回 朔太郎忌

詩から音楽へ

—コンサート&シンポジウム—

日時 5月14日(土) 午後2時開演

場所 ベイシア文化ホール(群馬県民会館)

小ホール

入場料 500円

【コンサート】

・西村朗作曲「猫町」、「青猫」の五つの詩

・西田直嗣作曲 連歌「蛇苺」、

混声合唱組曲「変身物語」

【シンポジウム】

「Metamorphose 詩から音楽へ」

パネリスト／西村 朗(作曲家)

西田直嗣(作曲家)

司会／三浦雅士(文芸評論家)

お問合せ 第44回朔太郎忌実行委員会

(萩原朔太郎記念・木と緑と詩のまち
前橋文学館内)

電話 027-235-8011

年刊詩集第三十九集 原稿募集

締切日 七月三十一日(日) 必着

参加費 会員 5000円
会員外 5500円

*但し、二頁を超える作品は、いずれの場合も一頁あたり2000円の追加となります。

形式 見開き二頁(40字×40行)を基本とし、最初の五行は表題・作者名。

*行数オーバーの場合追加料金となりますのでご注意ください。

発行 十一月発行

配布 平成二十八年度総会にて(2部)

*当日欠席で郵送を希望する方は、参加費に送料500円を加算して振り込んでください。

参加費振込先 郵便振替で左記へ。

口座番号 00110151655622

口座名義 斉藤 守弘

*振り込み手数料は自己負担となります。

*年刊詩集分〇〇円・郵送料500円と明記のこと。

振込期限 十一月十日まで

原稿送付先 郵送・FAX・メールで受付

郵送

〒370-3504 北群馬郡榛東村広馬場1067-2
現代詩資料館「榛まほろば」内 群馬詩人クラブ事務局

富沢 智

FAX 0279155106695

メール harunamahoroba@nifty.com

*原稿はコピーをとっておいてください。

受贈誌御礼

*ご惠贈感謝します。

秋田県現代詩人協会会報 53

秋田県現代詩年鑑 2016

中日詩人会会報 185

関西詩人協会会報 80

岐阜県詩人集 第3号

鹿兒島県詩集 第189集 鹿兒島県詩人協会

北海道詩人 北海道詩人協会会報 140

静岡県詩人 静岡県詩人協会会報 117

福島県現代詩人会会報 112

農民文学 311 日本農民文学界

秋田県現代詩人協会会報 53

山形詩人 92

夜凍河 22

space 126

仙人掌 30

紫翠 31

千年樹 65

蠟 58

コールサック 84

SCRAMBLE 140

ひょうたん 58

複眼系 51

Essence 創刊号

花 64

紙魚 64

黒豹 140

葉群 54

雨期 66

苦三昧 25

さが連詩 9

河 36

(二月二十九日現在 敬称略)

◆会員名簿の訂正

一月にお配りした名簿に間違いがありました。お詫びいたします。正しい住所は左記の通りです。名簿の訂正をお願いいたします。

No. 75 寺内 拓

〒370010081 高崎市浜川町八九四-1 小此木様方

No. 107 柳沢幸雄

〒372100026 伊勢崎市宮前町三〇七一 携帯0901742718245

◆編集後記◆

「最後のチャンスだから是非・・・」と群馬詩人クラブから、幹事役員の要請がありました。能力が無い、出来ない、知らない、やりたくない、ないないと逃げ腰。

断り切れないまま、佐伯圭さん、金井裕美子さんベテランのお二人と共に会報の編集に携わる事になりました。

「そんなに難しくないからやりましょう」とあたたかいお言葉にホッとして知らない分野に足を踏み入れました。未熟な私が付いていけるよう判るように教えて頂いております。廃用症候群(脳や体を使わないことで機能が低下する)にとっぷり浸かっている私ですが、チャンスを生かして挑戦しております。

(金井治子)